

# ⑥ 古代人の祈りー土偶から勾玉までー

那珂市歴史民俗資料館

ナカマチクジラの化石(ハクジラの歯約30本)は、昭和59年(1984)JR水郡線額田駅西の光照寺崖下から発見されました。この地層は瓜連層群の泥岩層に属し約1100万年前のものです。これによってゴリラやチンパンジーなど大型類人猿と人類が分化する中新世期には、那珂台地周辺まで海域が及んでいたことが分かります。県立自然博物館に常設展示されています。



土偶は縄文時代の遺跡から出土するもので、体型から女性であることが分かります。女性が子を産むことから、女性の神秘性への崇敬や多くの子どもの誕生を祈る心を窺うことができます。また、狩猟生活を中心としているだけに豊漁や豊猟を願う心も込められています。これは縄文時代後期の筒型土偶(高さ約20cm)と称され、那珂市戸の立石遺跡から出土したものです。顔面のみや破片が出土する例が多い中で、ほぼ完全な形での出土は珍しく貴重なものです(水戸市・個人蔵)

人面付土器は弥生時代の再葬用骨壺で、特に死者の顔を付したところに特徴があります。これは那珂市本米崎の海後遺跡から出土したもの(写真;茨城県指定文化財:茨城県立歴史館蔵)で、土葬してから数年後に骨上げし、洗骨してこの壺に入れ再度埋葬したと思われます。ここには死者の霊への敬いが感じ取れます。県内では、海後遺跡の他に筑西市の女方遺跡、常陸大宮市の小野天神前遺跡と泉坂下遺跡から出土しています。



一部が開口している門部白河内古墳群2号墳(円墳)の石室内正面の壁面には、水鳥と立木が線刻されています(装飾古墳)。ここには、死者の霊が鳥に乗って霊上界へ飛び立つ思想が窺えます。内部は適度な湿度が保たれており、この自然状態が壁画をよく保存しているようです。壁画の代表的な例はひたちなか市の虎塚古墳ですが、線刻石室を持つ古墳は、近辺では水戸市の吉田古墳、常陸太田市の幡横穴古墳などに見られます。

那珂市菅谷の高野氏館跡から出土した軟質な石製の子持ち勾玉は、古墳時代のもので祭祀に用いられたものと思われます(那珂市指定文化財:那珂市蔵)。

